



明けましておめでとうございます。今年もどうかよろしく願いいたします。地球研の第三期中期計画における新しい体制の初年度もあと3か月を残すのみとなりました。幸い、新しい体制の目玉でもあるプログラム制も順調に滑り出し、三つの実践プログラムのプログラム・ディレクター（PD）にも、杉原薫さん（前政策研究大学院大学特別教授）、中静透さん（前東北大学特別教授）にすでにご就任いただき、西条辰義さん（現高知工科大学教授）にも、近々ご就任いただく予定になっています。

地球研が新たに進める研究の柱は、文理融合の学際研究に加え、社会との協働による「超学際」研究です。（超学際研究は英語では **transdisciplinary research** ですが、地球研ではよく **TD** と略していますので、ここでは以下 **TD** と略します。）地球研で進められる研究プロジェクトには、必ず **TD** 的要素を求めており、地球研の国際活動の一環として進めている **Future Earth** も、この **TD** がキーワードとなっています。地球環境問題を解決に導くためには、研究者間の協働だけではなく、社会の様々な関係者との協働、**TD** が必要なのは、当然なわけです。

ただ、**TD** は、環境問題の解決や持続可能な社会への転換をめざす活動には不可欠ですが、一筋縄ではいかない困難さも抱えています。17世紀頃から西欧を中心に発展し、日本の研究者も明治以降どっぷり浸かってきた近代科学は、良い意味でも悪い意味でも、研究者の間だけで了解可能な世界を作ってきたからです。もちろん、**TD** は、これまでの分野ごとの研究 (**disciplinary research**) や、学際的な研究 (**interdisciplinary research**) を否定するものではなく、むしろ、それらがベースにあります。かといって、研究者目線で社会の関係者に「教える」的な態度では、研究者と社会の真の信頼関係は生まれません。協働には、お互いの強みや立場を出しつつ、問題解決に向けて謙虚に学び、協力する姿勢が必要なのです。

地球研では、そのための仕組みや方法なども考えていくために、コアプログラム（PDは谷口真人副所長）をつくり、実践プログラムや研究戦略国際センター（センター長は窪田順平副所長）などとも連携しながら、**TD** を進めるつもりです。大学を中心とする研究者コミュニティにも **TD** を正しく理解し、評価してもらう仕組みを作っていく必要もあります。**TD** とは、これまでの近代科学を乗り越えて、地球社会のための科学を作り出していく営為であると、私は考えています。

地球社会は、今、大きく揺れ動いています。地球的な視点よりも国の利益を第一とする視点が、昨年来、世界的に強まっています。差別や格差などによるさまざまなレベルでの「南北問題」がこれに絡んでいます。一方で、地球規模で環境と社会の問題を解決しようとする **SDGs**（持続可能な開発目標）といった新たな国際枠組みも動き出しています。このような時だからこそ、**TD** の推進が必要であり、大学共同利用機関としての地球研の存在意義は、まさにそこにあります。今年も、所員の皆さんと更に協働を進めたいと思います。